

中央教育審議会 初等中等教育分科会
幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会
—第 1 回会議の主な意見等の整理—

1. 幼児期の学びの特性

(幼児期の基本をなす考え方・枠組み等)

- 幼児教育の基本をなす考え方として、子供の発達の特徴を踏まえながら教育していくが、家庭での養育が基盤であり、家庭と両輪で進めるもの。
- 近年、幼児教育施設は、子供を預かるだけではなく、積極的な教育の意義を担うようになった。しっかりした家庭で育っていても、従来以上にその成長を促すことや、家庭教育が十分でない場合でも、それを補完する機能を持っている。
- 乳幼児期は、この世界や世の中の在り方を学ぶ基本的な部分で、そこに関わり積極的に取り組んで何かを得ていく。そういう意欲に満ちた自発的で能動的に周りの物事や人に関わっていく活動を「遊び」という。遊びを通して、やってみたくことが生まれ、粘り強く取り組み、工夫するようになる。
- 満 1 歳前後以降は、環境での出会い、大人、子供同士から学んでいく。親との安定した愛着をベースとし、保育者へと広がり、3 歳前後から仲間集団での遊びが広がる。どの環境でも興味を持ち、気づきが生まれることを通して学んでいく。
- 幼児教育の基本的枠組みとして、乳幼児は環境への関わりを通して、特に自発的な学びを通して学ぶ。そこで育つ基本的な力を資質・能力とし、気付くこと（知識及び技能の基礎）、思考し工夫すること（思考力、判断力、表現力等の基礎）、意欲を持ち粘り強く取り組み協力すること（学びに向かう力、人間性等）からなる。それは認知面（気づきと思考）と非認知面（学びに向かう力）とからなる。具体的な内容として 5 つの領域（健康、人間関係、環境、言葉、表現）を措定する。その具体的な内容をもった活動を導くことにより資質・能力を育てていき、幼児期の終わりに育ってほしい 10 個の姿として整理もされている。
- 一人一人をケアし、学びを見定め、育ちの道筋を捉えることが重要。大きく言えば同じ方向に向かって育っていくが、丁寧に見ると育ちの道筋は一人一人異なり独自。もともとの能力・資質や家庭での養育の差もある。
- 一人ごとの違いを受け止め、その存在を安定したものとして支え、周りの環境での出会いを可能にし、好奇心を広げ、追求を導いていくことが大事。保育者はそれを記録しながら育ちを捉えていく。時には保護者とともに育てる関係をつくる。

(幼児教育の重要性・効果)

- 海外においては長期縦断研究とそのメタ分析としての展望研究から、幼児期の教育がその後の生涯にわたる学業達成、職業生活、家庭生活等で多面的に影響を与えることが実証的に明らかにされてきている。中でも、「保育（教育）」の質が発達に与える影響が正負いずれの影響も及ぼすことも示されている。
- OECD の研究によれば、質の高い幼児教育・保育の効果として、言語の使用やアカデミックスキルの芽生え、早期の識字および計算、社会情緒的スキル等の様々な領域の子供の早期発達と就学後のパフォーマンスにとって有益であることが指摘。健康的な摂食習慣や身体活動習慣の定着の後押しなど、健康・ウェルビーイングにも

効果が及ぶ。労働市場への参加、貧困の削減、異なる世代間の社会的移動性及び社会的統合の向上など、その後の人生における成果にもつながるエビデンスが増加。

- イギリスのデータでは、保育の質が高いほど子供のリテラシーが高くなるとか、11歳になっても、その効果が残ることなどが示されている。
- カナダのケベック州のデータでは、幼児期の教育の質が下がると子供の生涯の発達に悪影響があるというデータも出されている。
- イギリスのデータでは、所得階層別に見ると、一般的に困難な層ほど発達の遅延率も高くなるが、幼児教育を受けている方が遅延のリスクを低減することも示されている。
- 日本での縦断調査でも、3歳児までの生活習慣がその後の学びに向かう力に、コミュニケーションが学習態度等に影響することが示されている。
- 経済学の多くの研究で、大人になって社会的・経済的に成功する上で、学力に代表される認知能力に加えて、我慢強くやり遂げるような自制心、実行機能と呼ばれる能力、人と協働できる能力などの非認知能力が重要であることが明らかにされている。非認知能力が、就学前の段階でより発達することも知られている。
- 親への介入が効果的という研究や、目標を作ってカリキュラムを進めていく中で、どのような具体的な取組が効果的か、検証できる枠組みを作ることも重要。

(認知能力・非認知能力)

- 認知能力とは知的な力で、知識・技能、思考力等を含む。非認知能力は、意欲・意志、自覚し見渡す力、人と協力する力等を含む。乳幼児期・学童期・思春期を通して育つ。認知と非認知は相互に関連し、支え合って育っていく。1つの活動の中に認知面と非認知面が必ず含まれ共に育つ。資質・能力の基礎を保育のプロセスとして捉え、意欲を持って取り組み(学びに向かう)、様々なことを見だし(気づき)、試行錯誤しながら工夫すること(思考力の芽生え)が生まれ発展していく。
- 非認知能力とは、主に意欲・意志・情動・社会性に関わる3つの要素(①自分の目標を目指して粘り強く取り組む、②そのためにやり方を調整し工夫する、③友達と同じ目標に向けて協力し合う。)からなる。

特に幼児期(満4歳から5歳)に顕著な発達が見られ、学童期・思春期の発達を経て、大人に近づく。気質差、個人差が大きい。自己をコントロールすることが基礎にあるが、認知と非認知の両面を必要とする。教育を通して育成可能性がある。

①五感を通じた体験の重要性

- 脳の発達を促す経験(学習)は何かというと、多感覚の同時入力を経験値を上昇させると考えられ、五感を介して様々な情報を得ている。
- 幼児期に入力する記憶は、様々なものと組み合わせられた大きな記憶にしてあげれば、後々いろいろなものとマッチして、後で出てきて使うことができる。いろいろな五感と連合させるような、外からのインプットを入れてあげる必要。
- 人は70%以上の外部情報を五感のうち目から取るという非常に珍しい生き物。子供は目から情報を取ろうとするので、サポートをして目以外の情報をうまく入力することが、幼少期の大きな記憶の形成のために大事。多感覚の同時入力をサポートすることにより、内部形成の効率が上がり、脳の経験値が上がる。
- 共感性という相手のことをおもんばかる・理解しようという感覚は、適度な物理的な相互作用・触覚によって学ぶところが多く、物理的な相互作用をどうやってあげるかも非常に大事なポイント。

- 原体験がある子供は、小学校に入ってから学びに向かう力があり、小学校、中学校、高校などが幼児期の教育に学ぶことも重要。また、五感や実体験を大切にすることを踏まえつつ、ICT との向き合い方も議論が必要。

②「遊び」を通じ総合的に学ぶことの重要性

- 乳幼児期の遊びにおける学びの特徴として、周囲の人々を見て真似て学ぶこともあるし、話を聞いて学ぶこともある。機械的に同じことをまねるのではなく、人がなぜそれをするかという意図・目標・目的を考えながら学ぶ。幼児期は探索としての学習が中心になる。
- 遊びは子供たちに柔軟なやり方や違うやり方を教えてくれる大事な意味がある。そういう特徴が小学校以上の系統的な学びと異なる探究的なもの。
- 幼児期の学びとは、無自覚から自覚へ、表面的な理解から仕組みの理解へ進む。細部の順序性は想定しない。
- 幼児期は遊びを中心として、頭も心も体も動かして、主体的に様々な対象と直接関わりながら総合的に学んでいる。遊びを通して思考を巡らせて創造力を発揮し、友達とイメージを共有・協力して様々なことを学んでいる。
- 5歳児では、幼児が自ら自分の思いや考えを実現しようとする気持ちが育ってきて、これまでの経験を生かして、自分で材料や道具を選んだり、探し出したりするようになる。保育者はヒントを与えるのか、試行錯誤を見守るのか、幼児の状況に応じて関わる。
- 5歳児になってくると、自分たちでこれまでの経験を生かして、遊びが複雑に展開していく。友達同士で刺激を受け合いながら、次から次へと遊びが発展して、遊びに取り組む時間も長くなっていく。
- 遊びを通しての総合的な指導について、幼児が周囲の環境に多様な仕方で関わることは、その環境に様々な意味を発見し、様々な関わり方を発見するという。様々な能力が個別に発達するのではなく、相互に関連し合い総合的に発達していく。
- よく遊ぶことにより、よく学ぶということができていく。生涯にわたって学び続けることができるよう、学ぶことの意味は生きることに重なる。
- 幼児教育で、遊びの中で主体的に学ぶ土台を作るという日本の幼児教育は非常に優れている。幼児教育でも小学校以上でも、子供の主体性を奪うことなく、学ぶ環境を構築していくことが大事。
- 早期詰め込み教育ではなく、全ての人に平等に良質な、遊びながら学ぶ環境を提供したいという意図から、義務教育の低年齢化には賛成したい。
- 遊びの中で子供たちが育つことや、一人一人に丁寧に関わり個性を発揮していくこと自体が大事にされるべき。
- 要領、指針、幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿、資質能力の3つの柱、小学校の学習指導要領、スタートカリキュラムをベースに、遊びを通して、一人一人の興味関心に応じた、主体的・探究的な遊びという点を大事にしたい。
- 遊ぶといっても何らかの文化が大事であり、文化の中で一番大きいものは日本語自体。日本語で遊ぶことにより、文化の継承も行われる。絵本の読み聞かせは、共感的な関係で言葉を獲得するもので大変すばらしい。また、劇を行うといった言葉と体を一体化させて名文で遊ぶことも良い。

- スマホやタブレットが幼児にも身近になる中、直接体験が重要という観点からメディアを遠ざけるのではなく、メディアを使って、例えば、何か撮影してみんなでお話をするといったメディア遊びの可能性を排除していないか留意が必要。

2. 幼児教育の質を支える要素

① 幼児の体験の幅を広げ、質を深めるための関わりや環境設定

- 幼児教育の質を支える要素としての幼児の体験の幅と質について関心を持っており、活動の中で一人一人の幼児がどのような体験をして、その体験がその子にとってどういう意味があるのかが重要。
- 環境を通して行う教育を分かりやすくかみ砕いて、現場で行政と連携しながら共有する必要。教材研究を行うことで、子供主体で自ら社会と肯定的に関わっていくための資質能力が育成されるよう、環境を通して行う教育を深める必要。
- 保育者は、実際の保育を通して幼児の姿から読み取ったことを記録にして保育を振り返り、次の指導に生かすという PDCA のサイクルを通して、幼児の体験が豊かになるようにしている。
- 多様なものや人との関わりの中でいかに学びを深めていくかが大事。どのようなものや人との関わりを保障するか、カリキュラムの中に書き込まれる必要。また、そのカリキュラムを実践するための研修の場を保障することが重要。
- カリキュラム等の政策が極めて重要。各園のレベルで重要な点として、年齢を貫く乳幼児期の一本化したカリキュラム、施設類型を超えて統一したカリキュラムの実施、職場での保育者の研修・学習の内容や時間の保障が重要。また、質の向上のためには、カリキュラムの実施と評価が重要。
- 保育の質を園のレベルで考えたときには、最も重要なのがカリキュラムと職場環境の中の保育者の研修であり、政策によって向上・改善できる部分。
- カリキュラムフレームワークが保育者と子供・保護者のやり取りの強力なツール。どこの国でも 0-2 歳よりは 3-5 歳での参加が課されてきている（義務、必修化）。参加国のうち 25% しか同一年齢で統一カリキュラムとはなっていない。同年齢での複数のカリキュラムは、園を通しての ECEC の質の相違を生むので、統一化されていく大切さも指摘されている。
- 全ての施設類型の保育者の幼児教育における教育の質規準を上げることが大事。特に子供に向かう活動以外の時間を保障し、現職研修に参加することが重要。
- 質評価のための政策の一例として、イギリスでは、幼児期の学びの目標を一つにし、統一のカリキュラムを構築・評価するサイクルや制度が体系的に作られている。負担感だけが強くなる評価は問題だが、専門性を踏まえた評価が重要。
- 海外においても、質向上のために、カリキュラムの重要性が指摘されている。日本の幼児教育は、遊びを通じた学びによって、子供の社会情動的側面と認知的側面の両面の育成を可能としている。今後、施設類型に関わりなく、遊びの経験を深めていくとはどういうことか、保育者が各園を基盤に現職研修を通してカリキュラムの理解を深め、質の向上へ向けた実践ができるための政策的支援が重要。

②発達の段階に応じた関わりや環境の変化の工夫

- 人の脳の発達に伴う大きさは、10歳ぐらいで大人の脳と同じぐらいの大きさに発達する。一方、シナプスという神経ネットワークの数が人生で一番多いのは生まれて半年から1年で、10歳ぐらいにかけて半分ぐらいになる。この時期はポテンシャルが高いが、それ自体は能力という意味では高くない。1歳から10歳の間、外からどういった刺激を与えるかで、個性や能力がテーラーメイド化し個人が決まる大事な時期。
- 幼児期の学びがなぜ必要なのかというと、内部モデルをつくる時に大事。外から入ってくる情報を100%取り入れているわけではなく、自分の中に持っている予想と外から入ってくる情報を比較して、予想誤差があったときに初めて、脳はそれを修正するように働く。内部モデルが幼少期にできてないと、外の環境から入ってくる情報を比較することができず、自分で判断できなくなってしまう。
- 脳は、生まれながらに持っている情報のほか、学びや発達の中で持っている情報を脳の中の内部情報として蓄え、外部情報を突き合わせて、不良設定問題を解いているが、この条件設定が脳の中に蓄えられてないと判断ができなくなる。
- 大人になった脳はほとんどの情報を脳の中に入れていない、入れないようにしているが、そのときに大事になってくるのは、幼少期のときにどういった脳が内部形成できているかということであり、この点へのエフォートは非常に大事。
- 子供は乳幼児から主体であり、保育者もまた導く主体で、子供の主体性を尊重しながらもそれを伸ばしていく工夫をしていく。
- 保育者の専門性とは、子供の成長していく姿を捉え、その都度の状態を理解し、園の環境を整え、直接・間接のかかわりを通して子供を育てていくことにある。保育者が子供をよりよく育てたいという願いの元で計画・実施していく営みを可能とすることで、主体的な在り方が発揮される。保育者の主体性は、子供の主体性を尊重し育成することを含んだ二重の主体性に基づいている。
- 乳幼児期の発達の特徴は、親子関係の愛着による安定性と、個人差が大きいことであり、道筋が独自。2歳・3歳になると、本人が自覚できる発達へと移る。
- 非認知面としては、感情や思考をコントロールする力が重要であり、特に4歳から6歳ぐらいに発達していく。さらに保育者や仲間集団を通して、文化社会に触れ、そこから様々なことを学んで、小学校に向かう。
- OECDの研究によれば、日本の保育者は、社会情緒的な要素を含む子供の発達に関する内容や学び・遊びの支援に関する内容について、継続的に専門性の向上を図っている割合が非常に高い。
- 幼児期は自己中心性が前面に出てくる時期であり、自分の世界でいろいろ考えることは当たり前であるので、保育者がそうした観点から子供の動きが見られるように研修することが大事。
- 一人一人の特性に応じた指導について、幼児の発達は大筋では共通だが、個々に目を向けると、発達、遊び方、体験は様々。こうした一人一人の独自性を大切にしていって、発達の特性を生かした集団を作り出すようにしている。
- 5歳児になると、友達とのやり取りが盛んになって、いざこざや葛藤などが起きても自分たちで何とか解決しようとするようになり、保育者は幼児の姿を見守り、自分がどうすればよかったのか、自分の行動を振り返ることができるような働きかけなど、幼児の発達段階に応じ、保育者の関わり方も変化していく。

③地域における幼児教育推進体制の充実

- 本市では、母子保健から、0歳から18歳まで全てを教育委員会に寄せて、教育と福祉の融合を図っている。また、エビデンスに基づく教育施策を展開しており、小学校1年生から中学3年生、全ての子供たちの学力、体力、生活習慣、生活状況のデータを持つとともに、家庭の情報として、生活保護など家庭の情報も、教育委員会で一元的に把握できる体制を取っている。
- 保育者の世代交代もあり、若年層が増えている中、子供たちがどこにいても質の高い教育・保育を受けられるよう、幼児教育の質の向上を図っていくことは必須。研修体制の構築や中堅のミドルリーダーの育成にも取り組むことが重要。

④家庭との連携

- 幼児教育の基本をなす考え方として、子供の発達の特徴を踏まえながら教育していくが、家庭での養育が基盤であり、家庭と両輪で進めるもの。[再掲]
- 日本では、保護者とのコミュニケーションを日常的、定期的に行っている割合がともに高く、国際的に見ても、幼児教育・保育施設が保護者とのコミュニケーションを重視している。
- 子育て・教育は、第一義的に保護者にあることを、しっかり認識する必要。家庭を強調する中で、幼児教育と小学校教育の架け橋の議論がなされるべき。
- 家庭が大変重要ということで、保護者が焦ってしまうことがないように留意が必要。「架け橋」が「駆け足」にならないようにしたい。
- 幼児教育と小学校教育の架け橋の背骨の部分は、家庭教育にあり、保護者が、幼児教育段階でどのような能力が求められ、小学校入学時にはどのような能力が求められているかを共通理解することが重要。
- 地域を巻き込んで保護者と協働する子育て支援を含め、家庭との連携が重要。
- 特に保護者と園との教育連携は極めて重要。デジタル化によって写真や映像で伝える部分もあるが、人的資源や園務のデジタル化といった組織的な情報化、情報基盤の整備も検討が必要。
- 幼児教育の質を支えるのは、家庭、幼児教育施設、地域。家庭、家庭では体験できない世界の豊かさに出会う場である各幼児教育施設、豊かな体験が得られる場である地域が連携協力することで各機能がアップする。
- 幼児期における運動の意義は、体力・運動能力の向上や、意欲的な心の育成等であり、どう身体活動や運動量を確保していくか、また、園と家庭・地域の連携をどう図り、教育につなげていくのか議論することが重要。

3. 幼児教育と小学校教育の接続期における教育の質の現状と課題

①接続期の教育の意義や重要性の共有

- OECDの研究によれば、幼保小接続における教育（指導）の継続性の意義として、カリキュラムの一貫性や継続的な幼保小接続の取組は、その後の学力や社会的成長

と関連していると指摘。また、幼保小のカリキュラムに一貫性を持たせること、教育内容の理解の共有、指導の連続性が課題であると指摘。各国でも大きな関心事となっており、政府の戦略や政策文書に含まれることが増加しており、接続の強化のためのカリキュラム改革や幼児教育・保育施設の一体化の取組等を紹介。

- OECD の社会情動的スキル（非認知スキル）と認知スキルの関係の実証研究によれば、初期の読み書きや絵本との出会い、自己調整等が、その後のアウトカムに大きく影響を与えている。5歳児の社会情動的な側面の発達と、リテラシー的なものだけではなく作業記憶や心的柔軟性が相互に関連して育っている。幼児教育に参加した子供のほうが、より自信を持って大人と共に行動する傾向がある。
- 5歳児でも、幼児期から児童期への教育の連続性の保障のためには、幼児期に培った遊びや暮らしの中で、気づきから探究へという学びのプロセスが、遊びの中で保障され、小学1年以降にも保障するための連携と接続が重要。各園でカリキュラム・マネジメントを通じ、幼児教育の質の向上を考えていくことが重要。
- プロジェクトをしながらコアスキルを身につけていくことを、カリキュラムにおいても大事にするのが良い。そうしたカリキュラムづくりが、幼児教育から学校教育の両方に求められており、そこに接続の鍵があるのではないかと。
- 0歳から18歳までの学びをつなげていく保幼小接続の意義・重要性の理解や、子供たちに応じた実践の充実を市町村教育委員会等と連携しながら取り組むとともに、保護者にも、遊びが非常に大事だということも伝え取組を進めていきたい。
- 「幼児期の教育に学ぶ」という象徴的な言葉が、学習指導要領改訂の論点整理に示された、学習する子供の視点に立つという言葉ではなかったか。この視点に立って、主体的・対話的で深い学びを小学校、中学校、高等学校では実現しようということで、特に小学校では、こうした実践を熱心に行っている。
- 小学校では、低学年で生活科等を中心に活動や体験を潤沢に行い、幼児期の学びを生かしている。一人一人に応じ、画一的でなく個別なものに配慮した教育が小学校以降でも行われ、これまで以上に行われようとしている。
- 小学校以降につながっていくため、スタートカリキュラムの考え方が位置づけられている。小学校へ入学した子供が、幼稚園、保育所、認定こども園などの遊びや生活を通じた学びと育ちを基礎として、主体的に自己を発揮し、新しい学校生活を創り出していくためのカリキュラムを整理しながら進めてきた。学習指導要領の中では、合科的・関連的な指導、弾力的な時間割の編成といったことがカリキュラム・マネジメントの考えの中に位置づけられてきた。
- 幼稚園教育要領でも小学校との接続が明示され、小学校学習指導要領の総則や生活科の中にスタートカリキュラムに関する記述が盛り込まれている。各学校では、入学当初のカリキュラムも幼児期の学びを生かした形で、長時間にならない教科の時間、活動や体験を位置づけた教科学習、生活科等を位置づけた横断的な学びを意識して、入学当初のカリキュラムが実現され始めている。
- 方法論等に走ると、早期教育やドリル、じっと座らせるといったことで、保護者や教育関係者を焦らせてしまうので、目的とかけ離れないよう注意が必要。小学校なども、遊びを通じた学びの意義など幼児教育から学ぶことが重要。
- 幼児教育と小学校教育のそれぞれの良さや特性を尊重し、より充実を図っていきながら、一人一人の成長をしっかりと支えていくため、両者に橋を架ける意味があり、決して小学校教育の前倒しを意味しているのではないと考えている。

②要領や指針の理念の普及

- 要領、指針、幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿、資質能力の3つの柱、小学校の学習指導要領、スタートカリキュラムをベースに、遊びを通して、一人一人の興味関心に応じた、主体的・探究的な遊びという点を大事にしたい。[再掲]
- 保育者は、幼児一人一人の特性や興味・関心に応じて保育を展開しており、保育所や認定こども園を同じ。幼児教育で大切にしていることなどを家庭や地域と共有し連携していくことで、幼児教育の質を高めていくことができる。
- 一人一人が持っている資質能力を本当に発揮させられるような環境を作り出すことが大切であり、幼児教育が今まで培ってきたことが、小学校教育や社会にもっと浸透しても良い。
- 幼児教育の意味が家庭にまだまだ伝わっていないことに歯がゆさを感じている。幼児期の教育の意味をきちんと発信していくことが、子育て支援として大切。

③「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の実践への活用

- 保育者が子供をよりよく育てたいという願いをもち、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を念頭に計画を立て、子供の状態に応じて変化をさせていくことが重要。
- 小学校では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえた工夫をすることになっており、スタートカリキュラムの実践が広がり始めている。
- 幼児教育施設と小学校との連携は年々増加。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示されたことで、小学校の教師との協議が充実するなどの声が聞かれる。一方、「学びが育まれる過程が一樣ではないため、小学校教育にどのようにつながっているのかをイメージしにくい」「幼児教育の現場ではカリキュラムの参考となる資料が少ない、どのように作成すればよいかわからないといったことが要因となって、接続期のカリキュラムが進まない」「一つの園から複数の小学校に入学するなどの状況から、幼保小連携を効果的に進めることが難しい」「経験の浅い保育者は幼児の体験が深まるように環境を工夫することができにくい」などの声もある。

④多様な施設における5歳児への関わりと、小学校における6歳児への関わりをつなぐ工夫（幼保小が連携した学びや生活の基盤づくりなど）

- 幼児期、特に5歳児での確かな学びを小学校以降につなげていくことを考える際、5歳児は、条件や環境を整えば十分な力を発揮する学びの過程がある。活動や体験を通して感覚や感動を手に入れ、それを繰り返していく中で、多くの気づきや発見を得る。そこでは、予想や予測、比較や分類といった思考を十分行う。その結果、規則性や法則性を確かにし始めていく。こうした学びのプロセスを大切にすることが、小学校以降に豊かな学びが繋がっていく。また、自分らしさや自分のよさを受け止め自立しようとする、自らの意思をもって思いや願いを実現しようとする、言葉や記号に関心を持って親しみ関わろうとする姿が育つことが期待できる。
- プログラムについて、小学校の先取り・前倒しとの勝手な解釈が独り歩きしないか、子供の姿を踏まえてやりたいことができないという本末転倒なものにならないか、改革の意図がうまく伝わらず、保育士や5歳児が大変な思いをしないかといっ

た危惧がある。特に保育者に対して、この会の趣旨やプログラム、委員の意見を具体的に分かりやすく実践事例等を通して見える化をしていきたい。

- 架け橋のプログラムを作って展開していくためには、幼小ともに先生たちが交流しながら積み重ねていく研修の場が必要。
- 教師側への配慮として、例えば接続に関し、どのように研修を通じて支援していくか、接続を円滑にしていく仕組みが重要。
- 幼児教育から小学校・中学校にかけての発達のマトリックス例だけでなく、評価をする際のマトリックスが必要だと考えており、幼小で共有しながら子供たちの育ちを見ていくことが望ましい。

4. 一人一人の成長を支えるために配慮すべき事項

①配慮が必要な幼児を早期の支援につなぐための方策

- 孤立している家庭では、発達段階等における不安を抱えて悩んでいる保護者が多くとともに、どこに相談に行ったらいいのかわからないといった問題がある。また、経済的に不利な家庭においても、十分な時間や余裕がなく、子供たちと関わる時間が少なく、絵本の読み聞かせや一緒に遊んだりするといった体験を得られない家庭も多い。小学校入学時点で格差が見られるといった課題がある。保護者や地域との関わり、幼稚園・保育園と小学校との連携は非常に重要。
- 特別なニーズのある子供についても議論してほしい。多様性を保障する保育の重要性の中で、特別な支援を要する子供の心の育ちも議論したい。
- 現場に寄り添う形で、成長が遅い子供や発達が遅れている子供、低所得の家庭などにも目を配りながら取り組むことが重要。早期〇〇教育が前倒しで進んでいくような誤解を現場や保護者に与えないようにする中、期待に応えていくことが重要。
- 保育者は様々な悩みを抱えている。特に外国籍の子供たちの教育や文化理解の質を更に高める研修は必要で、養成大学等で行う必要。

②乳幼児期も含めた家庭教育を支援する方策

- 育児において動画サイトがかなり活用され、過剰な影響があるという指摘がされたり、それが社会経済的な背景とも相関があるという研究もあつたりすることから、育児へのICTの影響に対する親への介入が重要なポイント。
- 家庭教育では、どのような学びや経験を積み重ねるのか、園種を問わずに保護者が理解できるようにする必要。プログラムと関連づけられた共通のカルテのようなものにより、成長を見取っていくことで、バラつきを少しずつ是正していく必要。

③データの蓄積・活用による支援策の改善

- 幼児期ならではの五感を通じた心を動かす体験を大切にし、そこで幼児が何を学んでいるか、学びを次にどう生かしていくのかを、幼児教育と小学校教育に携わる者同士が具体的な事例やデータを基に議論し合い、共通理解していくことが大切。